

# 経営と健康

第2回

## 日本超高層建築の父・郭茂林

講談師 一龍斎貞花

に出掛け交渉。

敷地一杯に建てるのはいいが、高さは絶対に31メートル以下でなければいけない。

虎ノ門の交差点は、日本一といつてよいほど交通が混雑していた。ここに9階建てのビルを、敷地一杯に建てたらいいよ交通混雑は増すばかり。

茂林はピースの箱を使って、

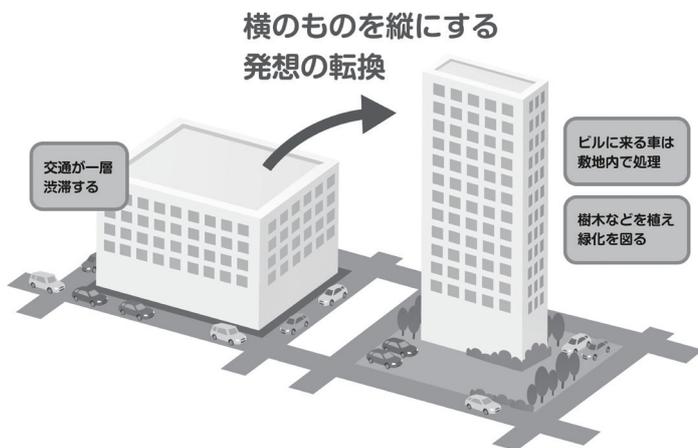
「容量は同じだから、高層ビルを建てれば、オープンスペースも出来る。交通渋滞を緩和し、ビル周辺に空間と緑を確保するためには高さ制限を取り払うしか方法はない。横の物を縦に建てるんです」

と、解りやすく説明。

半年後の昭和37年、日本建築学会は建設大臣に、

「容積率を決めれば、高さ制限を撤廃

してもいい」と答申。



日本の超高層建築を建てる一つの要因に、「特定街区」という制度があり、地権者つまり地主の重なる複数の敷地を一つにまとめて街を作り、周辺道路

の整備やオープンスペースを敷地内に設け、そこに緑を増やす。このビルへ来る自動車は敷地内で処理をする。

この計画内容で、特定街区の指定が受けられれば、ボーナスとして容積率の割り増しも受けられる。これが建築基準法改正へと到るのです。それまで余り考慮されなかった景観も大事にしたのです。

横のものを縦に、発想の転換

霞が関ビルの施主は三井不動産、設計は山下設計事務所、施工は鹿島建設と三井建設。

基本計画を最初に持ち込んだのは三井不動産だが、実際にお膳立てをして問題を解決していったのは、不動産や建設部門が垣根を超えて集まった霞が

明暦の大火で焼失、以後築かれぬままの江戸城天守閣。現代の15階建てビルに匹敵、本丸の土地が標高約20メートル、下から見上げれば80メートルという高層建築、今再建運動があり私も会員の一人、ただし市所有の名古屋城と違って、宮内庁はじめいろいろ自由に出来ない問題があり、それが大難関。各地にも城があり安土城をはじめ木造の高層建築が江戸時代前からありました。しかし、戦後東京では、31メートルの高さ制限・9階建てしか建てられない。虎ノ門五千坪の敷地にオフィスビル建設計画。相談を受けた台湾出身の郭茂林が、

「高さ制限を撤廃し、高層建築を建てて世界と肩を並べることです」

施主の三井不動産江戸英雄社長も賛同し、江戸社長・郭も建設省、東京都

関ビル建設委員会でした。

郭は、三井不動産の建築顧問として招かれ、昭和40年（1965）に設置された建設委員会の、事実上の座長として取りまとめていくことになった。

日本で初めての超高層ビル。建築材料、細かい電設資材もおろそかに出来ません。地震・風に対する構造の問題、効率よく経済的な建築のノウハウなど未知の分野が多く、80人を越えるそうそうたるメンバー。これを一つにまとめていったのは、郭の豊富なネットワークと、マネージメントによるものでした。

三井不動産江戸社長は、建設の中心が鹿島建設なので、

「ビル建設が成功すればその先駆けとして、鹿島は非常に有利になるはずだ」と、役員を連れて鹿島建設に乗り込み、「高層ビル建築の研究開発費を、まけてもらいたい」

鹿島守之助会長は即座に、「結構です」

驚いた鹿島の担当者が、

「会長の一言は、10億円ですよ」と。昭和40年当時の10億円です。大企業

トップの、正に男と男の大きな腹の見せどころでした。

難関のひとつひとつを、専門委員会で検討し、本委員で解決する。毎週金曜日の本委員会は、百回以上議論をたかかわせ、鹿島の二階建設工事事務所長は、しゃく取り虫のように自力で登りながら鉄骨を組み立てていくタワークレーンや、プレハブ化を推し進める綿密な工程管理工法、H鋼による鉄骨工法、特殊な鉄の床敷設工法、鉄骨を火事から防ぐ新技術を次々と開発。

昭和4年、三井本館建設の材料は、すべて外国製だったものを、40年後のこの霞が関ビルはほとんどが日本製。

地震に対してどう対処するか、それには強固な構造で耐えるのではなく、地震の力を柳のように柔らかく受け流す考え方で、東京大学武藤清教授が構築した柔構造理論です。

この霞が関ビルを、低い建物にするか、中高層にするか、超高層にするか、検討していた企画初期段階に、東大の建築学科にいた郭が、武藤先生にお願いしてこの頃実用化が始まった研究室

の電子計算機で、霞が関ビルの構造試算をして頂き、その結果、超高層化決断にいたったのでございます。

その決断の1963年に、武藤教授は東大を定年退官して鹿島建設の副社長に就任され、以後構造設計を指揮されながら霞が関ビル建設の具体化を見守られたのでした。

このようにあらゆるところで、日本のトップの方の力の結集でありました。地震の場合の各階の振動を解析して高層ビルのゆれ、耐震理論の裏付けがなされるなど、日本最初の新技術が次々と構築されていき、技術の革新、高層建築の成功は、鹿島建設一層の発展への基になりました。

渋谷の長い歩道橋が造られた時、歩くとユラユラゆれて気持ちが悪かった。はじめは工事の失敗か、地震かと思っただけで、多くの人が気持ちが悪いといわれたほどでした。

工事中から見学者が多く、弁当屋が現れたほど。

鹿島建設のこの工事のビデオがきちんと残されていて、「空を拓く」という映画の中にも使われ、私も観させて

頂きました。

敷地面積1万6319平方メートル、延べ床面積15万3223平方、容積率90%、地下3階地上36階、高さ147メートル。31メートルから一気に147メートルのビル完成。工期は40年3月から、43年3月までの3年間ですが、計画委員会の設置が37年ですから実質6年間。かくして昭和43年（1968年）4月18日、日本最初の超高層ビル完成。

「オイ、完成したぞ」

「万歳、万歳！」

「日本最初の超高層ビルだよ、世界へ飛躍する第一歩だ」

「郭先生のお陰です。ここまでまとめ、リードして下さったから出来たんです」

「イヤイヤ私一人ではなにも出来ません、鹿島さんはじめみんなの力を合わせただけです」

「郭先生……」

手を取り合って喜ぶ男達の目に涙が光っていたのでございました。

郭茂林の活躍はまだまだ続きます。